
東方蛇神伝

沙羅双樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方蛇神伝

【Nコード】

N2920W

【作者名】

沙羅双樹

【あらすじ】

勝手に生き返らされて、チートな能力をつけられて、戦わせられて、何で？って聞いたら「暇潰し」って言われて、
回りに回される人(?) 生のお話

ready(前書き)

はじめまして、沙羅双樹と言います。ハチャメチャな作品ですが、暖かい目で見てください。

ready

「うん、どこどこ？」

気付けば知らない場所にいた

まあ、普通に焦った。所謂パニックってやつ

「えーつと…」

考え中考え中考え中…何か変な学生メガネが頭の中に出てきたけど
無視

「友達と会って遊んで解散して跳ねられてそれから…あっここか」
……………あれ？

独り言の中でさらっと流したけど…跳ねられて…？

あっ、そうだ。車だ。車に跳ねられて…

いや、おかしい。あっそうだ、車じゃなくてトラックだ。車とトラックじゃ全然違うからな。トラックなんか跳ねられたら即死だ

いや、そこじゃない

…即死…？

「あっそうか、俺死んだのか」

あああああああああ！！！！！？？

死んだ？俺が？じゃあ何ここ？死後の世界か何かですか？

「そうだ」

「えっ…？」

振り向くと大きな扉があった。その上から声が響いて来た

「何？このシリアス…」

「いや、何？その雰囲気ぶち壊しのセリフ…」

何だか軽く呆れた声がした様な気がする…

よく見ると大きな扉の上に座っている人らしきものがいた…

人らしき…まあ、簡単に言つと銀色に輝いている。

うん、驚かない。どうしたんだ？俺…

「まあ、そういう事で…ほっ」

そう言つて扉の上から下りてくる。そして地面にフワリと着地する。

フワリと、だ

「ようこそ、死後の世界へ」

で、そのあと色々あって、まあ納得した（させられた）訳だが、ここはまともな死後の世界じゃないらしい…どうやらここは今、目の前で

何処からか出してきたテーブルの前で、

何処からか出してきた椅子に座って、

何処からか出してきた紅茶を飲んでいる

『世界意思』の部屋らしい…

そして俺は特別招待されたらしいのだが…

「何で俺？」

まあ、俺としては一番納得がいてない部分でありまして…

「あゝ、その事ね」

ズズッと紅茶を飲んでいる彼は軽〜いテンションで一言、

「知らない」

「はああああ〜〜〜!?!?」

俺が生きてきた15年の中で、一番の音量でシャウトした。まあ、死んでるんだが…

すると、彼は少しも調子を変えずに言葉を続ける

「いやね、君を生き返らせてって頼んできたの『次元意思』なんだよね〜…だから知らない」

「なんだよ、それ…ふざけんじゃねえぞ!」

勝手に俺の命が取り引きされているようで、怒りが沸いてきた
すると彼は少し怯えたふりをして話し始めた

「ゴメンゴメン。その代わりに、生き返った君に好きな能力をつけてあげるよ。それで許してよ、ね?」

「好きな能力?」

「そう、僕はこう見えて凄いだよ だから人を生まれ変わらせるなんてヨユーだし、僕の好き勝手にする事もできるんだよね〜」

そこで一拍置いて続ける

「で、どうするっ?」

俺はよく、こんなことを考えていた、

夢がもし1つ叶うなら、と

お金持ちになるとか、空を飛べるようになるとか、瞬間移動ができるようになるとか…

色々考えて1つには絞ったが、叶うことはないと思って忘れていた。だが今、叶おうとしている

だから、俺は叫んだ

「透明人間になりたい!!」

「はあ？」

また呆れたような声が聞こえたが、15歳、思春期真っ只中の俺には聞こえなかった

「ま、まあ、いいよ。…でもそんなのでいいの?」

「じゃあ追加で不老不死」

「いや、そういう事じゃなくて…、まあいいや。後はこっちでどうにかしとくよ」

あれ?良かったのか?それに後って何?そして俺は結局どうなるの?

色んな疑問が残る中、彼は言った。最後の言葉を…

「行ってらっしゃい、チート君。もう会わないことを願って」

疑問を口に出す間もなく、俺は床にできた穴に飲み込まれた。

薄れゆく意識の中で、俺は思ったことを呟いた…

「ベタだなあ…」

そして俺は暗い闇へと落ちていった。

ready (後書き)

こんな感じですが、暖かい目で見えて貰えると嬉しいです。
あと、評価して貰えるともっと嬉しいです。

あとあと、コメント貰えるともっともっと嬉しいです！

あとあとあと…(以下略)

flight (前書き)

今はポンポン出しますが、すぐに遅くなると思います…
お付き合いください

fight

真っ暗な世界…

そこでやっと自分が目を閉じている事に気づいた

目を開けると、青い空と、白い雲…

「どじ、どじ？」

自分の姿を見る

…裸だ…

悪い夢であってほしいな…
単純にそう思った

周りを見る。小さな島と海

俺のいる場所、その島

どこからか声が聞こえてきた

「Let's enjoy!」

できるかぁ！思わずつつこむ

「どじどじ？」

誰かは分からないが、多分こいつは馬鹿なんだ。絶対そうだ。こんなところに来た人間にどうやって楽しめと？

というか生きれるのか？

「大丈夫、大丈夫！そこはゲームとかでよくあるチュートリアルみたいな場所だから。それに君は不老不死じゃないか」

あつ不老不死になってたんだ…って心読めんのか！

「読めるよお〜。だって君の所有権は僕にあるんだし」

ちよつと待て、所有権がなんだって？

「だから君の所有権。君を生き返らせた世界意思から貰ったの。あれ？知らなかった？」

初耳だよ…てか人間に所有権なんかあったのか？

「う〜ん…分かりやすく言うと、この世界はゲームみたいな場所で、僕は君のコントローラー…的な（笑）」

「xxxxxxxxx…!」

（笑）じゃねえよと叫ぶつもりだったが言葉が話せない

「そんなに怒らないでよ。コントローラープログラムって言ったって実際に操る訳じゃないよ。僕にできることは君の能力を書き直すこと。こつやって、ね！」

「書き直すって……あれ」

「人語を思い出しましたか？」

こいつには逆らえないんだなあとか思いつつ、やっぱり気になることを聞く

「でも何で俺？」

「ああ、その事ねえ……」

少し考えたような間を置いて、答えを述べる

「わかんない」

「軽いなあ、俺の命……」

「まあ、ぶつちゃけ誰でも良かったんだよねえ。さつきゲームみたいな世界っていったけど、本当にゲームの世界なんだよ。で、前に使っていた駒が死んじゃったわけ。だから代わりの存在を探していたんだ」

衝撃の事実、本当に弄ばれてた俺の命……俺エ……

「まあ、飽きたら終わりにするから、それまで僕の遊びに付き合っ
てよね。大丈夫、少なくとも3年ぐらいは遊ぶから」

只今俺の余命が宣告されました

「大丈夫だって。僕が君の所有権を手放すだけで、君は自由になる

し、死ぬことなんてないよ」

ふーん、そうなんだ……

「ところで、あんた誰？」

「あつ、言っただけだったね」

まあ、大体予想はついてるんですが、

「何を隠そうこの僕こそが『次元意思』だあ〜！ヨロシクウ」

なんとも気の抜ける自己紹介だった

自分が不老不死になっていた事はわかったが、結局能力はどうなったのか聞いてなかった

そこで次元意思に聞いてみたんだが

「物質が周りに与える影響を消去する程度の能力」

って言われた

「東方？」

「いいえ、マイブームです」

まあ生前、理系だった俺は使い方をすぐに理解した。言葉にすると、

「俺という物質が光を反射、又は吸収し、周りに与える影響を消去」

そういうと俺の姿が消える

これで晴れて透明人間になれる。ただ、ここには女どころか人がいない

「能力を使う必要がない

「服だけでもくれませんか？」

「OK！これでどう？」

赤いベストに、黄色いインナーと薄い茶色の短パン

圭一？…いや考えないでおこう

「はい、これ武器」

………バット………

「やっぱり圭一じゃねえか！」

「そうだけど？なにか？」

「なにか？じゃねえよ！」

「Let's撲殺！」

ドクロ？…いや、やめとこつ

「何でもできちゃうバット」

「やっぱりか！てか俺がやめとこつと思っただ事を片っ端から言っ
ていくなよー！」

話が進まねえ…

「わかったよ、じゃあ本題を。はい」

目の前に光の柱が出てきて…

「第一試合、対鬼巫女！」

「勝てるかああああ！！！！」

Ready

キングクリムゾン！

Fight！！

KO

…

…

…

「だろっねえ」

「殺すぞ!!」

こうしてMUGENな日々が始まった

永遠は、あるよ…

f i g h t (後書き)

もう気づいてるかと思いますが、ここに出てくる意思達は、ほぼオ
リキャラです

名前を借りただけですんで…はい) (口癖)

K O … ? (前書き)

コメント貰えると嬉しいんですけど、事情によりなかなか返せませんが、貰えると嬉しいんです！
メチャクチャ嬉しいんです！

KO…？

まあ、かじった程度なら知っているMUGENという格ゲーツクールその動画はいくつか見たことがあるが、さっきの鬼巫女（12P）なんてのは最凶（強じゃなくて凶　ここ重要）だ

何しろ負けてるところを見たことがない。何かには負けるそうだが… 忘れた

まあ、そういう訳で

「ふっざっけんなー！」

「何を怒っているのか僕にはよくわからないのですよ」

「何、可愛い子ぶってんだジジイ！」

ドゴオオン！

「誰がジジイだ、糞餓鬼！」

なんか地雷踏んだ…

えーりんえーりん、助けてえーりん

「次空の顎に引き裂かれよー！！」

「ギャアアアア！」

ガガガガガガ、ドゴオオン

…本当に助けてください(泣)

「まあ、そんな感じだ」

「どんな感じだ」

なんかまとめ始めてたから、即座に妨害
まだ何も分かつちやいな

「どうでも良くね?」

「良いわけないだろ!どんだけ軽いんだ俺の命!」

「うっん、蟻ぐらい?」

「リアルだからやめて…」

こいつなら、マジで思ってそうだ…怖い…

「だってマジだもん。大丈夫、蟻には悲慈深く苦しみを与えないよ
うに殺すから」

「殺すのかよ!」

あつ、俺殺されるのか

短い転生生命だったなあ…

「駄目だよお、玩具は大切にしなきゃ」

既に玩具扱いでした…

あれ？蟻よりひどくねえか？

「さて、と…」

なんか、話を変えようとしている。何でこうなった…

「説明しよう！あの時君がウォークマンをしながら自転車に乗って道路に飛び出したからだ！」

はっ、反論できねえ…

転生すると記憶が無くなると聞いていたが、俺の場合はより鮮明になっっていく。

あの時、確かに俺はウォークマンをしていた。自転車にも乗っていた。そして、俺が片想いしていた人とすれ違った…そして…

「あつ、ゆk

」

バァン…

跳ねられた

「で、結局片想いのまま、君は死んじゃったんだ……」

「そう……だな……」

そして思い出した、あの時俺を挟んで反対側にあいつがいたんだっ
た……じゃああいつは？

「ああ、あの子ねえ……」

「知ってるのか!？」

「死んだよ」

「えっ…………」

「君のすぐあとに、死んじゃったみたいだよ。君が呼び止めなかつ
たら彼女はトラックの横を通っていたのにねえ……」

死んだ……？俺のせい……？

「う、うあああああああ!!」

「そうだねえ……そうだ、鬼巫女を倒せたら、彼女を生き還らせてあ
げるよ」

「倒せたら…?」

無理なことはわかっていた…でも…

「わかった、やるよ」

「ものわかりが早くて結構」

多分こいつは笑っていやがる、俺を見て…

そう思うと俺の中の何かが千切れそうになった

「ぜっす」

「えっ?何て?」

心が読めるんだから何を言ったかは分かっているんだろう…だが、俺はこいつに、そして自分自身に言い聞かせるように言った

「俺は絶対お前を殺す!!」

一瞬の沈黙、そのあと全身を走るような寒気

これが殺気…

「…殺す…と…アハハハハッツツ!!」

沈黙

「やってみる餓鬼があー!!」

震えあがる、俺の怒りや意識などとは無関係に…

長すぎる刹那のあとそいつは続けるように言った

「一億年早いんだよ、馬鹿が」

この時彼には目的ができた。

そして彼には課題ができた。

さらに彼には目標ができた。

そのあと彼は殺害予告をした相手に鍛えてもらっことになったんだ
が…

死にそうになりました

そう呟くのはまだ先の話…

そして本当に倒してしまうのはさらに先の

そして別の話…

KO...? (後書き)

なんか最初に考えていたシナリオから大きく変化しています…
どこかで矛盾してるかもしれませんが、どうぞよろしく願います
す

Win(前書き)

戦闘シーンの書き方のコツ教えてください！(泣)
上手く書けませんか！

まあ、何だかんだで修業(?)は順調に進んだ

最初の方はまだ楽だった。『普通』の相手だったからだ

そのうちに段々『強』くなっていた。それでも俺は勝ち進んだ

相手は『凶』悪になっていく。能力の使い方を必死になって考えた。そのかいあってか、俺はまだ死なずにすんだ

それからだ、俺が人外になったのは

その時、確かに俺の目の前に『神』がいた

金色に輝き、今まではなんだったのかと絶望を植え付けられる

勝てない

素直にそう思った

それでも……………

R a d y

勝たなくてはいけない

F i g h t ! !

光

目の前を覆う光…

ゾワッ…

寒気、これは死の感覚

「影響消去！零^{ゼロ}！」

俺が考えた一番最初の技、能力を使い、『相手の攻撃が周りに与える影響を消去』する結果

自分を中心に円のように張った結果。だが、張りそびれた攻撃が俺を襲う

いたいいたい痛い痛い痛い！！

全身を駆け抜ける痛み、体力は半分ぐらいまで減っただろう…

だが、まだ始まってから一秒すら経っていなかった

短期決戦といこう。俺はそう決めた

「影響消去 インビシブル 透明」

俺の能力の使い方は大きく分けて二種類、

何かが与える影響を消去する

何かに与える影響を消去する

さっきの結界は前者にあたる

そしてこの技は自分に与える影響を全て消去する

まあ、やってることは一緒だから、自分が与える影響を全て消去する

と言ってもなんら問題はない

だが、大きな問題がある。それは……………

「何も見えねえ……」

それどころか、聞こえない、匂わない、気づかない、殴れない、わからない……

だから俺は目にだけ能力を解除する。多分相手からは目だけ見えて

るんだろっなあ…

などと怖い考えは捨てておく

「おお、探してる探してる」

この能力を使うと、相手は俺のことが見えない、聞こえない、匂わない、気づかない、わからない

しかも攻撃も当たらない

あいつは至るところに極太レーザーを撃っている

後ろに立って無駄無駄あ！とか殴りたいが、殴っても当たらないんだよねえ…

なんか、殴ったら透ける…

「危ねっ！」

目を消す。今頃俺の体は光に包まれているだろう…

目だけ消されるとか絶対いやだ

「さてと、反撃といこうか」

目を出す

気づいてない

後ろにまわる

気づかれない

急所を狙う

気づけない

現れる

気づくが遅い

撃つ！

ドゴォン！

今ので心臓は潰れたはずだ…

「勝った…」

光

「っ!!! 『零』!」

俺の体を光が包むが、ダメージはない

影が現れる…

「生きてやがる…」

こんなんじゃ死なないってわけか…

「だったら…」

俺は結界を小さくして、体にその効果を付ける

「ゼロインビシブル
零透明」

相手からは俺の存在は確認できるが、攻撃は効かない

光が俺を包むが、俺は進み続ける…

そして、目の前まで近づき

腕を差し込む

ダメージはない…が、そこで能力を解除する

前に次元意思聞いたことがあった

「能力使って透けるけど、そこで能力解除したらどうなんだ？」

「引っ付くよ」

「引っ付く？」

「そう、なんか細かい部分で引っ付くみたい」

「それって危くない？」

「大丈夫、能力を使えば元に戻せるよ」

それもそうか…

俺の腕はこいつの心臓と引っ付いているだろう…

だから俺は腕を引き抜く！

ビチビチビチッ！！

嫌な音と共に『神』は倒れた

俺は能力を使って引っ付いている相手の肉塊を地面に払い落とす…

You Win

「お疲れ、おめでとう」

次元意思が話しかけてきた

「なんだよ、祝福なんて気持ち悪い…」

「いやあ、まさか勝っちゃうとはねえ…」

「確かに強かったが…それがどうした？」

「……………いや、何でもないよ」

「そうか、じゃあ俺は寝るわ」

「あ、ああ、お休み」

「？お、お休み」

そう言っつて俺は横になり寝始めた。
布団？そんなものないよ

…

…

…

「僕も負けちゃいそうだね…」

その声は寝ている彼には聞こえなかった

Win (後書き)

何か！何か助言を！（泣）

まあ、これからの話は書いている僕自身も予測がつかない状態です。

頑張れ少年 名前をだす機会を失った…いつか出します

s t u d y (前書き)

ちゃんとした東方のメンバーっていつ出るんでしょうか…
それすら未定な僕は大丈夫なんでしょうか…
とにかく、今は続きを書くのを頑張ります

s t u d y

次の日から俺は能力の使い方の前よりも必死になって考えた

昨日には気づかなかつたが、足の裏が大きなダメージを食らっていたからだ

理由を次元意思に聞くと、

「歩くのには衝撃がいる。その為に能力が勝手に歩きたいと言う意思に反応して能力を解除したんだろうね」

だそうだ

影響の消去をして、大気圧の差で体が破裂はしないのかなどと色々考えたが、何も起きてないし大丈夫なんだろう

そして気づいたことがある

俺の能力はある程度までなら意思に基づき自動で動くようだ

そうして自分の能力を理解していくうちに、俺は能力の服を作ることを閃いた

どういう事かというと、自分の周りにぴったりと張り付く結界を張る

少しの隙間を開けて、だ

能力の結界は色んな層を重ねて作る

宇宙服を想像するとい

あれは熱に強い層や、圧力に強い層などを重ねて作っている

それと同じように作っていく

結果、全ての影響を消去する結界が出来上がる

すると面白いことに、物を殴るとそこがへこんだ

影響がなくなるというのは、ほとんどないものと考えていい。

すると、

殴る 層と手の間の物質が『何も無い』層の部分に入る 層の外側
でくっつく 手がめり込む 繰り返し

よって、力を入れなくても簡単に決る（凝縮させる？）（ことができ
るようになる

歩きたい時は地面を蹴れば一応進めるが、止まれない…

まあ、色々と問題があるが、面白い能力だということはわかった

それにこれなら「無駄無駄無駄あ！！」とかできる

時間とかの影響消去できないかなあ…

そして時は動き出す…

「つとお、危ねえ」

はい、絶賛戦闘中です

そして能力が使えません

「能力に頼りすぎだよ。ということで能力禁止」

って言われたんで使えない、というか使えなくされた

あいつが俺のプログラム変えられるの忘れてた…

「あれ？1対1だったよな？相手増えてるんだけど…？」

今戦ってるのは青色で腕が何本もあるインドの神様っぽいやつだ

「よくわかんねえから殴る！」

今まで能力を使っていたとはいえ、すでに俺は化け物並の力を持っている

マスタースパーク…

「これが神の力が…」

まあ、半分以上防いでも体力の半分を削られるような攻撃を耐えられるやつもいないか

まあ、一体いたけど…

当たらなかったただけだろう。たぶん

でも鬼巫女には効かないとがありそうだなあ

「はい、お疲れ。能力の使用を許可するね」

「はい、どうも。あっ、あと島の修復頼むわ。今の戦いでなんか色々とぶっ飛んだみたいだし」

「リョウカ〜イ」

そうしてまた1日が終わる…

この時、彼はまだ知らない

彼が戦っていたのは次元意思に制限されて、本気の1割も出せていないことを…

この時、彼はまだ知らない

今この海の間には恐竜すら、まだいないことを…

この時、彼はまだ知らない

彼自身も本気の1割も出せていないことを…

そして彼はいつか知るだろう

自分がいかに恐ろしい存在かを…

無限はどこまでもあるから無限なのだから

study (後書き)

????「なあ、俺の名前っていつ出んの？」

沙羅「次に出るよ」

????「本当か！？やったあ！！」

沙羅「まあ、すぐに変わるけどね」

????「えっ？」

沙羅「まあ、名前なんて小さな問題さ」

????「小さくても問題は問題だろ？」

沙羅「…頑張ります」

unknown(前書き)

さあ、混乱パーティーの始まり始まり
頑張っつてついて来てねえ)

unknown

それからも修業は続き、何年かの時がたった

時は進み…

今、俺はこう思う…

「じじじじじ」

気づくと知らない場所

広すぎる砂漠

どこまでも、どこまでも

なぜ、ここにいるのか。これがいつなのか。思い出そうとしても記憶がない

ますますパニックに陥る

「何が起こった！？おい！次元意思！！聞こえてるんだろ！？」

…沈黙…

いつまでもいつまでもいつまでもいつまでもいつまでも

「 永遠は、あるよ」

「 つ！！？?」

声が聞こえた

知っている声だ

この声は

「 ああああああああ！！！！」

これまで感じたことがない程の頭痛

外部からの痛みじゃない。全てが回っていく感覚

その痛みで意識が遠退く

そして代わりに記憶が近づく

「 そうだ、俺は鬼巫女と戦ったんだ。それで」

「それで どうなったんだ？」

「 きろ、カムイ神威、起きろ」

誰だ？

ああ、母さんか

あれ？母さんって蛇だったっけ？

いや違うだろう

なんにしたって眠い

俺は翼で顔を拭くと、長細い体の上半身を上げた

…

……えっ!?

「な、なあ母さん……」

「なんだい、神威」

「その神威っていうのは俺の名前だよな」

「何をわかりきったことをいってんの」

「母さん、俺って何?」

「私の息子だよ」

「じゃなくて、どんな姿をしてるの?」

「私とおんなじような格好さ」

ということとは、蛇…

「色が違ったり、羽が生えたりしてるけど、そんなに気になるんだ
ったら、その池で見ときなさい」

俺は急いで池に向かった

「顔も洗っとくんだよー」

そこに写るのは…

「誰？というか何？この生物」

まあ、一個目は俺、なんだろう

そしてもうひとつ、こんなのは見たことがない

白い蛇、神の使いとか言われるあの蛇だ

それだけならまだいい

真っ黒な翼が生えている

俺の物なのか？

カジッ

「いってええ〜！！！」

痛覚はあった…痛い

「何バカやってんだい、10歳にもなって」

10歳？

頭の中に走馬灯のようなものが流れ始める

ただし巻き戻して、だ

産まれるまで行くと、真っ暗になる

「10歳になった時に記憶を戻すから」

次元意思の声

「じゃあ、しばらくさよならだね」

広すぎる砂漠、これは夢の…

誰かいる

世界が灰色に染まり…

ブツン、ザア

白いもやで何も見えない

フォン

「これはゲームじゃないんだ」

「は？」

これは、鬼巫女と戦う前の…

「君に倒してもらったのは全て次元を狂わせる者たちなんだ。僕が連れてきて弱くして戦わせた」

「何のために？お前が倒せば良かったじゃないか」

「君を強くするためだよ。僕じゃ勝てないからね」

一息置く

「僕の手じゃあいつを弱くすることも出来ない。だから今までとは全く違う戦いになると思う…」

それでも戦ってくれるかい？」

「約束は覚えているか？」

それはいつのことなのか、わからない程昔の約束

「うん、覚えているよ」

「わかった、やるう」

修業風景

世界意思

そして転生前の俺

プツン

そこで終わった

「行くよ、神威」

前の名前なんかとっくに忘れた

「はい、母さん」

これからは、神威として生きよう

新しい人（？）生だ

unknown(後書き)

連載が遅くなります。本当に遅くなります
すみません、頑張ります

mad (前書き)

とにかくグロいです

あんまりだ、っていう人の方が多いと思いますが、書いてる時に頭に映像が流れるのでキツイ…

mad

俺の1日は、だいぶん暇だ

起きる

顔を洗う

祈る

自分の神社へと行く

人々の願いを聞く

神へと伝える

黙祷

睡眠

まあ、こんな感じだ

何も食べないで生きれるので、食事はしない

気づいたかと思うが、俺の母さんは神だ

あと、俺も神らしい

ただ、神と言ってもだいぶん下位の方だそうだ

仕事は上位の神に人々の願いを伝えること、らしい

伝えているうちに信仰が集まり、神になったそうだ

誰に伝えるのかはまだ知らない

一度こんなことを聞いた

「上位の神って天照とか？」

「は？天照って誰？あんた何の話してるの？」

天照が忘れられてるなんて、どれだけ未来なんだよ…

黙祷も誰に捧げてるのか知らないし…

最近、行動に意味は求めないようにしている

さて、最近の状態だが、技術の進化した人間が月への移住を考えているらしい

永遠に近い寿命が得られるのかなんとか

あと、ここらにはいないが、妖怪が人間を襲っているらしい

最近は過激化して、それから逃げることも理由の一つのようだ

そんなうちに、何年かがたった

俺はまず擬人化に挑戦していた。理由は、『人間に戻りたい』からだ

出来たには出来たが、凄くつり目だ。あと、糸目。体は細長く、まるで蛇のようだ

空を飛ぶ練習もした

タイミングが難しいが、まあ、出来た

力いっぱい地面を叩き、叩いた瞬間に重力と空気抵抗を消去する。ある程度上がったなら翼を広げる

そうしたら飛べた

まあ、何だかんだで充実した生活を送っていた

そんなある日

俺はいつものように支度をして、神社へと行くところだった

俺は神に願いを伝えることは出来なかったので、道具運びをしていた

「先に行つとくよ」

そう言つと母さんは神社へと向かった

ゾワッ…

久しぶりに感じた寒気

これはあの時と同じ…

パン…!!

…死の感覚…

走った。走って走って走って走って

「なあ、こんなこととして許されるのか？」

誰がいる！

「しょうがないだろ！月に行くには金が必要なんだよ」

「そんな話聞いたことないぜ？」

「わかってんだろ？いつだって金を持つ者が救われるんだよ！」

「だからって神狩りなんか…」

「わかってねえなあ」

そう言っ手て手に何かを掴む

その手には…

(母さん！？)

「コイツを売り飛ばしや、大きな金になるだろ？なんたって神なんだからよお」

母さんの体は緑色だったはずだ…それが今は真っ赤に、真っ赤に、

真っ赤、赤、血の赤…

プツン

「うああああああ！！！！」

怒りでキレたわけじゃない

ただ、俺の中の理性が切れた

「マスタースパーク！！」

母さんを持っていない方の男が光に包まれる

「ギヤアツ」

悲鳴は短く途切れ、一瞬で灰になる

「な、何だてめえ！？」

答えは待っていないのか、銃を取り出す

パン！

頭が弾け飛ぶ

「脅かしやがって……………うわあ！？」

そこら中に飛び散った血や肉が、頭に向かって戻ってくる

そして何もなかったように元に戻る

「許さない……」

「すまなかった！命だけは！ご、ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！……」

「許さない、許さない許さない許さない……」

俺は擬人化を始める

「頼む！助けてくれ！」

「何で？」

確認、手は動く

「お、俺には家族がいて……」

ドコオオ……！！

「聞かない」

ドン！ドン！ドン！ドン！

「俺の、家族を、お前が、殺した！俺の、唯一の、家族を！」

もう既に男に意識はない

ガン！ガン！ガン！ガン！

「お前に、どんな、理由が、有ろうと！」

男の顔は形を留めていない

グチャ！グチャ！グチャ！グチャ！

「お前が、死ぬまで、殴るのを、止めない！」

顔は潰れ肉となり、肉は潰れ塊となる

ビチャ、ビチャ、ビチャ、ビチャ

「母さん！」

擬人化したままの赤い手で、母さんを抱き上げる

「母さん！母さん！」

返事はない

わかっていた、死んでるんだと

ふと、顔を上げた

そこには神社があった

「神よ、なぜ助けられなかった…」

それは理不尽だとわかっていた。だが、怒りが収まらなかった
目を閉じる

「マスタースパーク」

次に目を開いた時に神社はなかった

しばらくすると、妖怪達が集まってきた

張っていた結界が消えてしまったんだろう

俺は妖怪達に話し始めた

「俺は神だった！」

だが人を殺し、神ではなくなった！

もうすぐ人間は月への移住を開始する！

最後に一花咲かせたい奴は俺についてこい！」

…沈黙…

パチ…パチパチ、パチパチパチパチ

ワアアアアア！！！！！

「感謝する」

さあ、始めよう

「俺の名は神無！」

神で無くなり、神を無くした者だ！

さあ、皆の衆！

始めよう、戦争を「

Mad (後書き)

いつもよりも長くなりました

色々とおかしいところもあると思いますが、コメント貰えると嬉しいです

この話書いているとテンションが下がりました…

War (前書き)

東方キャラの出し方がわからなくなってきました…
今回は無理やり出します

まあ、こゝ愛嬌

War

あの宣言から3日後、全国の妖怪達が俺のもとに集まった

数は数えていないが、万は超えているそうだな

「人間は、月へと向かうつもりだ

人間がいなくなればお前達は消えるそうだな

だが、俺にはそんなことは関係ねえ

俺はただ、あいつらに報いを与えたいだけだ

どちらの目的にせよ、狙うべきは一つ

あの船だ

戦場で命令はしない、各自

潰せ、全てを」

戦争が始まった

敵もかなりの戦力をつぎ込んできた

増援も呼んだらしい

律儀に結界も張ってある

「俺には関係ないんだけどね」

相手は既に戦闘体制だ

「妖怪に張り合うつもりか」

さてと、戦いがっている奴を待たすのも悪い

さっさと始めよう

「戦闘開始」

全員が飛び込んで行く

音、音、音

食いちぎる音、金属のぶつかる音、発砲する音

それぞれが奮闘するなか

俺はそれを一人眺めていた

人間側に動きがあった

街の外に建てられた門から大砲のようなものが見えた

それは戦場へと運ばれ

ビュウン

撃たれた奴らは消し炭となった

「おいおい、レーザーとか無しだろ……」

俺は苦笑しながら戦況を見つめた

結果は妖怪の不利だった

人間の使う兵器で近づく前に殺されていった

まるで歴史に出てきた、大きな戦を見ているようだ

名前は忘れた

次々に殺され、数が減っていった

「そろそろ潮時か……」

俺はそう呟いて能力を使い、地面に細工を施す

全ての音が一瞬消えた

全ての音が悲鳴に変わる

地面が沈み始める

戦場の下の地面を影響を消去し、無力化する

人間も妖怪も関係なく沈む

「赤い血の池で焼かれる」

沈んだ先にあるものは…

全ては地面へと吸い込まれた

「さてと、お邪魔します」

門も結界も関係なく通り抜けていく

すぐに兵士が囲んできた

兵士のの周りからの空気圧を消去する

すると、中からの圧力が外からの圧力に勝ってしまい…

パン

弾け飛ぶ

「偉い人呼んで来てくれない？それまで暇潰ししとくからさ」

何人かが話し合い、一人が走ってどこかに走っていった

どうせ逃がしに行っただらろうけど

「さあ、遊ぼう」

周りの景色が真っ赤に染まる…

「あっ！いた！」

さっきの走っていった兵士を見つけた

女の人を連れている

「やっぱり逃げようとしてるじゃん」

先回りして、目の前に立つ

「見つけた」

グシヤッ

さっきの逆に能力を使い、潰す

「な、何が望みですか!？」

震えているような声が聞こえた

見ると、黒い長髪の女がいた

「強気だねえ、スゴいスゴい」

「こんなに殺して、何がしたいんですか!？」

無視ですか…

「仇だよ」

女はポカンとした表情で見つめてくる

「俺の親は、船に乗ろうとした奴らに金目当てに殺された」

「あの船に乗るためにお金を取った事なんて一度もないわ」

「船を作った自体が間違いだったんだ…あんな船さえなければ良かったんだ…」

「そんな争いが起きないように私は」

「もういいよ」

そう言っただけはきた道を辿る

「飽きた」

女は動けないようだった

突然過ぎて動けないのだろう

「あつ、そうだ！」

争いが無くなるんだったら兵士はいらないよね？」

少し止めた足を再び進める

すぐに兵士が囲んできた

まあ、話してた奴は死んだ（殺した）んだけどね

その後街では治安が悪くなった。抑えが無くなり争いが絶えず、起こった争いを止める奴もいなかったからだ

俺が裏で手引きしたこともあつたんだけど

人間が月に移住したのはそれから何年も後だった

War (後書き)

あまり詳しく東方の歴史を知らないので、こんな感じになりました…
東方自体、友達づたいにしか知らないし…
こんな状態で、よく書く気になったよなあ…ごめんなさい

reunion(前書き)

もう『東方キャラの出てこない二次小説』で通用するような気がしてきた…

頭の中では色々なキャラが出て来てるんですが、それが話になるのはいつのことやら…

r e u n i o n

「うん、暇だ」

何もやることがなくなってしまい、ぼろっとする他無い生活が続いていた

今は山道を歩いている

「どっかに残り物ないかなあ」

残り物〃生き残った者

最近戦争に集まらなかった妖怪や違う場所に住んでいた人間、あとたまに出てくる神などの清掃をしている

妖怪と人間と時々神

神を消すときが一番楽しい

まあ、それはおいといて

最近俺は『蛇神』と呼ばれているようだ

信仰は無いから神ではないのだが、神の血を引いているので神

そして、蛇の姿をしているので蛇神と呼ばれている

邪神とかけているらしい

さて、そんなことより問題は今がいつなのかだ

あの人間の技術力から見ただいぶん未来になるんだろうが、西暦を聞いても答えるやつがない

みんな揃って「知らない」の一点張りだ

おちよくっているのかと思ったこともあったが、全員本気でわからないようだった

「まさかパラレルワールドか!？」

……………静かだ

「寂しいねえ…殺すのやめようかなあ…なんちゃって」

やばいやばい、独り言が増えてきている。あまり独りじゃべっている、おかしな人に思われてしまう…」

「って、これも独り言お!？」

ダメだな、俺

がさがさっ

「およお?誰かいるのかい?」

少し後に草の中から少女が現れた

「どうしたんだい？こんな場所で？」

少女は何も答えなかった

俺は少しずつ少女に近づいていく

「こんな危ない場所で彷徨いてると…」

少女の体が一瞬ピクリと震えて力を無くしたように倒れる

「俺みたいなのに殺されちゃうよ？」

それから少女の体が動くことはなかった

「やっぱり瘴気にあてられたか」

少女の死体は土の中へと落ちていった

最近殺した奴はこうして葬っている

これは土葬になるんだろうか、それとも焼かれてるから火葬か？

どっちでもいいか…

それはそうと、俺の周りには人間にとってはいたって危険な『気』の様なものがある

本当はなんて言うのか知らないから、勝手に瘴気って呼んでる

あんまり、女・子どもを殺したくはないのだが、これも大いなる計画のため！

……まあ、計画なんてないんだが……

おっと、気配を感じる

俺以外の者は全て敵

相手を見ずに攻撃する

計画があるとすれば

「おつとつと…危ない危ない」

知ってる声、そして懐かしい声

「ヤッホー、久しぶり」

こいつを探すことだ

「久しぶりだなあ、次元意思い！！」

ガッ！ドッ！

こちらの攻撃は全体的確に防御されるが、反撃の余地を与えない速さで攻撃する

「恐いなあ、もうWWW」

「笑いながら言うセリフじゃねえだろ…」

「軽い軽いWWW」

ドスッ！

反撃できないようにしていたはずの次元意思のパンチが腹に入る

「くっ、やっぱり強いなあ…」

「そりゃ育て親だからねえ」

「親は死んださ」

「ふ〜ん。まあ、知ってるけどね」

このやるっ…

「さてと、そろそろ飽きたし本気で来てよ」

「結構本気なんだけど、な！」

出せる最大の速さで近づき殴る

その拳は相手に当たることなく、後ろの木に当たる

殴った部分が音もなくへこむ

能力を使い始めた証拠だ

「怖い怖いwww」

「黙って逃げや、銀色ジジイ!!」

「…本気で行こうか…」

瞬間、緑だった視界が銀色に変わる

「零!」

攻撃は俺の体に当たるが、ダメージにならない

山は崩れ、土地は平面へと変わっていく

世界が土と空だけになったとき、本気の勝負が始まった

「さあ、殺りあおうかあ!!!!」

いつまでも続くかのような戦いが始まった

r e u n i o n (後書き)

さあ、タイトルの通り『再会』です。読めました？僕は無理だったんですが…

こんな感じのペースで更新しようかなと思っています

しばらく東方キャラが出そうにないので、1ヶ月くらい見なくてもキャラは出てこないと思います

それ以上になつたら無理やり出します

感想はどんなことでもお待ちしています

このキーワードはいるんじゃないかと思うものがあれば、どしどし送ってください！

で、どしどしって何？

bloom (前書き)

今回の話にも東方キャラは出ません
次の話で出すつもりです
もうちょっとだけ待ってください…

b l o o m

ただいま次元意思と戦闘中

「やばいな…疲れてきやがった…」

そして今は結構苦戦中だったりする

やっぱり勝てないのかなあ…と思い始める

「…はあ～～～～」

「!?!?…何だよ？」

いきなり過ぎる大きな溜め息に少し戸惑う

「いやね？まだそんな戦い方しか出来ないのか…って思ってた…」

「何が言いたい？」

能力はフルで使っている

おかげで周りは、山があったことすら忘れさせるような風景になったが…

次元意思は呆れたように首を横に振った

「君には発想力と知識が足りない。それを養えると思ったからこんな過去に飛ばしたのに…」

おい、ちょっと待て、今過去って

「君にはわかっているんだろう？自分の意思とは別に能力が勝手に動くことが」

「ああ、そ、それより」

「それがわかってるのに…はあ…弱いものいじめをし過ぎたみたいだね」

「て、てめえ！おちよくんのも大概にしるよ！！」

俺は怒りに任せて殴りかかった

スツ　　ドシャツ！

気づくと俺は俯せに倒れ、首を手で押さえられていた

「馬鹿になったね…いいことを教えてあげるよ」

顔が近づく感覚があり、耳元で声がした

「制御も操作も干渉も、全て影響なんだよ？」

「べ」能力の『消去』は『操作』にも出来るからね」なあ」

自分の声で聞こえなかった言葉が聞こえてきた

「ありゃ？聞こえてないか…」

いつの間にか座っていた椅子と机を挟んでもう一人座っていた

「ちょっとやり過ぎじゃないかい？」

「なんだよ次元意思、いいだろ？一回ぐらいチートなキャラを作ってみたかったんだよ」

「いいけどさあ…あいつ、キレて包丁投げたことがあったんだけど…」

「あ…」

「椅子を投げて、相手を昏倒させたこともあったし」

「……………」

「あれじゃあ、僕達に歯向かってきてもおかしくないなあ」

「…後は頼んだ…」

「まっ、こっちで適当に制限かけとくわ」

「頼む…」

「ハイハイ」

やることは合っていたようだ

なんだか気の抜ける話し合いがあったが、それが証拠だろう

俺がしたのは

『俺への制限を消去する』

まさかそれがこいつからかけられた物だとはおもわなかったが…

力が湧いてくるのがわかったが、一つ疑問があった

「俺の能力って『物質』の影響しか消せなかったはずじゃあ…」

「……………」

「なあ、これってどついでっ…」

「本気でいくぞお！…！」

「誤魔化したっ！？」

まあ、俺にとってはいいことだし、出来るならそれでいい

頭の中に文字が表示される

『影響を操作する程度の能力』

…なんだかなあ…

分かりにくいような、そうでないような…

まあ、攻撃の幅は広がったのはわかった

「危ねっ！」

考えていて、攻撃を見ていなかった

とっさに、足に衝撃を操作して強化する

ブオン！

「うおっとー！」

ギリギリで避けたつもりだったのに、気づくと5メートルほど跳んでいた

「こいつは…すげえな…」

さて、いいことを教えてもらったんだから、お礼をしよう

「ほらほら、ボーツとしない！殺されたいの!？」

次元意思が音を超えるような速さで迫ってきた

空気を操作して、壁を創る

壁に激突して止まる

止まった瞬間に空気圧を操作して自由を奪う

「おっと、捕まっちゃった」

俺は次元意思の首に向かって刃のような自分の手を刺し込もうとして

止まった

体が動かない…能力も使えない

逆に動けないはずの次元意思が動き出す

「危なかったあ…」

「て、てめえ…何で…？」

「忘れたの？」

ズボツ！！

心臓を掴まれる

「君の所有権は僕が持つてるんだからね」

俺を襲う絶望感は痛みを忘れさせる程だった

「じゃあ最初から俺が勝つ可能性なんて…」

俺に戦意が残っていないのがわかったのか、胸に刺さっていた手を抜いて感情を込めずに一言

「零だね」

それだけ言っただけでケタケタと笑いだす

「あつ、そうだった。話があつたんだつた」

ピタリと笑いを止めて話し掛けてきた

「君の最近の行動は目に余るものがある。だからやめてもらうためにきたんだよ」

「…断れば？」

次元意思是ニコリと笑い、手のひらを上にして広げる

「君はもう、十分脅威なんだよね…だから…」

広げた手をゆっくりと閉じる

「ゲハアツ!!」

血を吐く。胸に激痛がはしる

「殺す」

「ああああ!! わかった、やめる! 約束する! だから止める!」

次元意思が手を広げると、痛みが引いていく

「それが本当なら、僕の命令には応じてもらっしょ?」

「わか、った…」

「よろしい。じゃあ君には監視をつけるから覚悟してね」

コクリと頷く。声を出すことすらしんどい

「約束を果たしてくれていれば、お礼に彼女の転生の話を叶えてあげるからね」

「えっ!？」

項垂れていた顔を上げた頃には、既に誰もいなかった

長い暇が始まる

bloom (後書き)

突然ですが、僕のこの世界での価値観を少し書こうと思います

まず、死なない〓存在が無くならないということ

能力の矛盾が発生した場合、妖力または霊力の高い方の能力が使われるということ

力(能力)と技術さえあれば誰の技でも誰にでも出来るということ
あと、転生は通常行われないということ…

まあ、向こう見ずな作品なので変更なども多々あるでしょうが、気にしないでください

いつかまとめられたらいいなあ…

u n d e r p l o t (前書き)

久々の更新です

こんな作品を読んでくれる人には感謝です(笑)

さて、今俺は叶無と共に地獄にいる

なにかおかしいところがあるか？

じゃあ、順序だてて説明していこう

あれから俺は「ねえねえ」(イラッ)

「なんだよ？」

「今、僕のこと名前で呼ばなかった？」

「呼んだけど何？」

「やっぱり！嬉しいなあ」

「何だよ？何かおかしなところがあったか？」

「いやあ、今まで「おい」とか「お前」としか呼ばれなかったから」

「ああもう、めんどくせえ！」

もうわかったかもしれないが、こいつが叶無だ

出会いの経緯は…起きたら生えてた

よくわからないだろうから、ちゃんと説明しよう

今の俺の体には首が2つある

もう一度言おう

俺の体には首が2つある

首だけが2つあり、翼の少し上で二股に分かれている

こいつが誰なのかというと…

「ダルい、自己紹介しといて」

「ハ〜イ！」

僕の名前は叶無、次元意思さんに言われて神無の監視をしてるんだ！

叶無なんて名前だけど、僕は男だからね

僕も一応転生者なんだ！生前はヒモで生活してました

ヨロシクウ
」

と、いうわけだ

色々と疑問だが、もう気にしないと決めた

だからといって、こんな監視の付け方しなくてもいいだろ…

そうだ、もう一つの方の説明だったな

まずは今がいつかって話からだ

次元意思との戦い、あれから何億年だったかな…1、2…まあ、いか

とにかく長い年月がたった

ちまちま殺すことにも飽きて、大陸ごと沈めたんだよな…

その時には名前の無い大陸（ムウ大陸）は深い深い場所に沈んでいる

新しい生命が誕生して恐竜も産まれたし、観賞していたのに…

「寝ている間に隕石降ってくるのかないわぁ…」

俺は自分の家を作っていたのだが、ピンポイントでその家に落ちてきた

「あそこには月の技術が詰まっていたのに…」

まあ、そういう訳で死んだらしい俺は、たくさん人や妖怪を殺してきたし地獄にいると思ったのだが疑問があった

「なあ、叶無」

「何？っていうかまた名前を」

「ここ地獄だよな」

「…まあ、そうだね」

「ここ何？」

「何って…」

少しおいて続ける

「お花畑でしょ」

「だよな〜……」

視界一面花、花、花…

「もう一回聞くよ？」

「何？」

「ここはどこ？」「多分地獄」「じゃあここは何？」「見るからに
お花畑」

……………

「えっ、と…どうする？」

「どうしようか」

「楽しそうだな？」

「だって、僕の能力使えば戻れるし…」

「そうだよ！それだ！早く使えよ！」

叶無の能力は『あらゆることを元に戻す程度の能力』だ

監視役にぴったりの能力だ。ホント…

「ダメだつたりするんだよね、それ」

誰もいないはずの前方から声が聞こえる

「またお前か…」

「次元意思様！」

叶無の顔がパアツと明るくなる

なぜだか知らないが、叶無は次元意思に異様に執着している。何で
かも気にしないと決めた

叶無が俺の体から離れて擬人化して次元意思えと走って行った

叶無の方からは自由に取り外し(？)出来るらしい…ひいきだ…

次元意思を見上げて話すのは癪なので、俺も擬人化して話を始める

「お前はどこにでも来るな」

「神無のいるところならどこでも行けるよ」

「僕に会いに来てくれたんですか！？嬉しいです！」

「話を聞けよ」

こついう奴がストーカーになるんだろっな…てかこいつって男だよ
な？

「で、何でダメなんだよ」

「やってもらいたい事があってね……」

「またか……」

今までにも何度がこういう事があった

「こいつを殺せ」とか「くをしろ」とか、よくわからないが命令には絶対なので従っている

「で、なんだよ？ やって欲しい事って」

「ここに屋敷を作ってほしいんだよ」

「はあ？ 何で？」

「理由は聞かない！ 命令だよ？ 良いじゃないか、時間はいくらでもあるんだし」

まあ、それはそうだが……あれ？

「なあ、次元意思。一つ質問していいか？」

「何？」

「俺って不老不死なんじよ」

「バイバイ」

「待てえ!!」

その願いが叶うことは無く、花畑には俺と叶無しかいなくなった

多分、空間移動であの世に飛ばされたんだろう。俺エ…

「なあ、叶無…」

「なあに？」

何もなくなつた場所からこちらへと視線を移す

「能力使つてく」

「全ては意思の元に」

あつ、もうダメだこいつ

戻ることを諦めて、材料を探すことにした。どうせ戻っても氷河期だし

それから長い年月がたち屋敷が出来上がった

だが、屋敷はとても禍々しいものだった

石で作った薪式の大きな風呂は、人間が百人ほど入れる大きさになり
修行場として使っている土を盛り上げただけの山は、エベレストと
並ぶような高さになり

屋敷からは邪気や瘴気や狂気が入り交じったようなどす黒いオーラ
を放っていた…

さらに年月がたった後、何人かの女性が現れた

彼女らがその屋敷を見たとき、緑の髪の女性は思わずこう呟いた

「何でもう出来てるのよ…?」

その答えを知る邪神は、すでにそこには居なかった

後にその屋敷で死者が罰を受けることを彼は知らない

u n d e r p l o t (後書き)

いつかオリジナルの作品も作りたいなあなんて考えています
まあ、紅魔館ぐらいまでは頑張るつもりです
お付き合いください(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2920w/>

東方蛇神伝

2011年10月2日22時01分発行